

資料編 2. 専門家インタビュー記録

専門家インタビューの記録は、できるだけ忠実に再現して掲載したが、プライベートな席での発言であり不適切な表現があったり、また編集者の理解によって発言者の意図が伝わらないなどの問題が起こりうると考えられる。これに関してはすべて編集者の責任であることを明記したい。

1. 清永賢二（都市防犯計画・青少年問題）／日本女子大学教授（2002年3月2日）

谷 伊藤（滋）先生からこの研究をやるよう言われました。最初、奥田先生に主査で私は副査でやってくれと言う条件で引き受けたら、奥田先生の体調が悪くてできないということで主査を引き受けました。引き受けた以上、引っ込みがつかなくなりまして、やらなければいけなくなりました。それで清水建設（株）の伊藤（篤）さんに手伝ってもらうことで基礎調査をやることになりました。他のメンバーは恒松先生、東郷先生、奥田先生ですね。これでは動かないですから。東郷さんの下の吉川さんと私と伊藤さんと3人で実質的なところをやっています。初年度ですから、とにかく色々な要素を出して、それがどの様に都市とか安全に係わっているかということ調べてみることにしました。調べ方としてはマスメディアです。一番影響があるのがテレビですがテレビを総合的に調べる方法がないですから。新聞をデータベースとして、それに対して、市民がどの様に反応しているかを調べてみました。かなりマスメディアの影響を受けてある部分が増幅されている。また、ある部分忘れられている。ということがあったので、今年度、それをある程度書き出してみることにしました。

清永 先生。ご存知だと思いますが。こういう事に関しては都庁のアンケート調査が役に立ちます。

谷 ええ。都庁のアンケートも調べております。

清永 不安感調査とかもやっておられますよね。

谷 ただ、ここ半年ぐらいで大きな事件がたくさん起こりました。ここ最近のものを調べてみることにしました。

清永 それでは、何にどうお答えしましょう。

谷 それですね。基本的には。

清永 この本（「都市と犯罪」）はお持ちですか？

谷 えっと、これは伊藤さんが持っていて私はまだ買っておりません。

清永 そうですか。これ差し上げます。古い本ですが、今は絶版になったんですね。日本が平和になったものですから、みんな誰もこういう本は書けなかったとゆうか、皆が書こうとしなかった。最後に、しょうがない、それでは私が書こうと諸先生のお名前を借りて私が若い時に書き上げました。私の研究もすべてがこれを元に始まっていきました。多分いま先生方がお作りになろうとしているのはこのようなダイヤグラムではないですか。

谷 そうですね。

清永 先生どうぞお持ち帰りください。

清永 これの改訂版をつくりかけて、途中で時間がなくてやめました。

谷 伊藤さんがこれを読んで、この部分を伊藤さんが書くことになっています。私はとにかく主査ということになっているので全体の総括をして。今日も伊藤さんにきてもらおうと思ったのですが、時間が合わなくて。それから現在これだけのアンケートが帰ってきています。

清永 それは市民調査ですか。それともサンプリング調査ですか。

谷 これは市民調査です。対象は市民をランダムにアクセスすることができないものですから学生を使いました。学生が10票をとってくるということで、できるだけ無作為に色々な地域でとってくるということでやっています。このアンケートの設計は伊藤さんにやっていただきました。少し専門すぎて答えられないという点が結構ありました。ですから、どんな答えでも答えた人しか分析していません。

清永 むしろ知っているものというよりも、覚えているものという印象が強くなりますよね。瞬間的に見ていくけども、人間って忘れていくものですね。半年経ちますとほとんど忘れちゃいます。

谷 それですね。まず、決まっている質問に答えていただいてから自由に話していただきたいと思います。まず先生、日本は安全な国という風に認識しておられる方ですか。

清永 安全な国であるかってことですね。絶対的な感じとそれから相対的な感じがあると思うのですが。相対的に他の諸外国と比べて見た場合、日本という国はまだ安全です。それはすでにもう数値がございませぬ。もし、あれでしたらどうぞお持ちください。相対的に見てまだ安全。しかし絶対的な量において日本は非常に危険性が増してきている。よく言われますけれども係数というのがございまして、警察が捕まえる数って警察が捕まえる努力をどのくらいしているかによりますけれども非常に急速に不安定さを増しているということかといえると思います。ただし不安定さっていうのがどういう風に不安定化してくかというのと2つございませぬ。質から量、量が質にかわっていくという風に考えるのが普通です。段々、犯罪に関して量が増えていきます。突然バーンと爆発するように全体がカタストロフィーになっていく。これが量の爆発が質に転換した時です。もしくは、質が量を誘発していくという次の次元がきますけれども、日本もその次のステップアップに入ってきたのじゃないかと思ひます。それからもう一つは、犯罪の問題で例えば、問題の解決の困難さです。解決の困難さの問題は、犯罪の辿って来た経緯、警察官の問題だかとかいろいろなもの関係している。(図を示しながら)これが我々だったらいいのですが、実際カーブそのものはかわらなくても。カーブの筋がかわらなくても、これがこっち側にもってきて、だんだんこっち側によってきていう話になってくると、A、B、Cとしますと、AがこうなってBがこうなってCがこうなる。カーブそのものは変わらないのだけでも、1つ1つは深刻ではないのだけれどもって感じになる。3つ重なりあうことによってなんていうか非常に問題が解けにくくなってしまふ。という状況になってしまう。そういう意味の深刻さがあると思ひます。この状況と、この状況が一気に襲いかかってきていると私もは見ています。

谷 次に、その日本の安全の優れている点はなんでしょう？

清永 安全の優れている点は先ほど申し上げましたように、諸外国と比べてという点で一つあると思ひます。一つは、諸外国と比べて言えることは、まだ地域コミュニティがしっかりしている点です。壊れているけどまだしっかりしている。お互いに助け合う。コミュニティとはご存知の通りコムっていうのとニテっていうのがあって、ともに安全に住みあうための共通の義務。その義務感っていうのは、まだ壊れていないだろう。しかし、急速な勢いでこここのところがレベルダウンしてきている。というのが確かだと思ひます。それはやはり、高度経済成長の中で人間が都市を求めた。都市を求めた背後にあったのが、ある程度農村的な人間関係のどろどろとした部分を持ったまま都市をつくり、そこから徐々に自由になった。自由になろうとしているけれども、1960-70年まで人間のつながりは農村的なものを持っていたけれども、それがだんだん壊れてきていると私は思ひます。もう一つ優れている点っていうのは警察力。警察力はまだ誇れる状態にあると思ひます。それはどういう事で測れるかっていうと、レスポンスタイムっていういいませぬが、警察がどのくらいで駆けつけてくれるかを見ますと、これはおそらく世界で一番だろうと思ひます。なぜこれがきいているのかっていういいませぬと交番。交番制度っていうのは、がっちりしていいませぬ速度を伴う。レスポンスが早い。だから私は、いけるのではないかと。それからもう一つ挙げるとすれば犯罪をやるうと思ひている、犯罪企図者といひませぬか。それがまだ、少ないと思ひます。その犯罪企図者の手段、つまりどういう風に犯罪をやったらいいのかっていうのが、学習がすすんでいない。悪辣なことをやれる犯罪者が少ないものですから、まだ助かっている。しかし国際化に従いまして非常に国際的な犯罪文化の交流が行われていいませぬ。急速に日本人は知恵をつけつつあります。それから、しょうがないことからだんだん入ってきていいませぬ、これはもう天下一品。どうにもなりません。

谷 日本は国際犯罪者から、犯罪天国だってよく言われますよね。店でもほとんど番せぬに商品が置いてありますし。みんな人がいい。

清永 そういう意味でだからまあ、こういうものがあるからまだ少しいいのかと思ひます。

谷 あの、先ほど安全は脅かされてきているという話がありましたけれども、その最大の脅威っていうのは何でしょう？

清永 それは犯罪者が広域化している。その原因はすごく簡単だけれど難しい。それこそまさに国際化が入ってきて犯罪文化が進行している、ということがあると思ひます。それから情報化が入ってきている。犯罪のやりとりっていうのは情報のやりとりです。例えば、警察が犯罪者を捕まえるっていうのは、その犯罪者を捕まえたその瞬間だけ、みんなは見ているけれども、実は犯罪者に関する情報をどれくらい集めてとっているかってことが問題です。ですから日本が江戸時代からよくなったというのは何かっていうと口の情報をしっかり捕まえるシステムっていうのがあったわけです。それがむしろ犯罪者のほうが警察情報

とかをうまく捕まえる時代がきまして、警察よりも彼らの方が進んでいる。コミュニケーションがいい。この中には空間の崩壊がある。空間が時代に合わなくなっていると思います。人間の集団の崩壊が進行してきていると同時に考えます。こういうものが複合して私は今の危機があるという風に考えています。この外側にもう一つ挙げるとすれば、抑止力がもはなくなっている。全体としましては警察力を中心としまして抑止力がもはなくなっている。こういう構造の中で、危機っていうものが生みだされてきているものと考えています。

谷 そうするとそれに対してどういう対策をしていきますか。

清永 難しいですね。複合現象ですのでやはり複合的にやらなければならない。やはり、複合的にやらなければいけないのですが、一度に複合的に何もかも行うのは不可能です。そういう意味で、伊藤先生にも申し上げましたが、私どもで考えたのは、奥田さんの言葉ですけども、社会設計、まちづくりとか、ひとづくりと言うのでしょうか、そういうものと物理的環境設計論とこの2つの方策があると思います。さらにそういうものを統合するものとして総合対策、総合防犯対策を考えましょう。そういう風な話になっているわけです。この中身として一つはコミュニティづくり、まちづくりがある。これによる意図しない。その人づくりをやりましょう。もう一つは、意図的な人づくりをやりましょう、というのがきているわけです。でこちらの方、まさに、安全なまちをつくりましょう。先生に差し上げることができたらよかったです。犯罪者を捕まえてっていつているわけですね。私は前の研究室にいた時に、それぞれのプロの犯罪者100人に面会して、どうやって犯罪をやるのかと聞いていたわけです。まず人間を知らなければいけない。犯罪を簡単にいえば簡単な話で。常に加害者がいて被害者がいて、それを結びつける関係があります。この条件が常にぴたっと合った所で犯罪が起こるわけです。つまり、被害者がいたって加害者がいないと犯罪が成り立たない。加害者、被害者がいたって周りのがっちり囲みこんでいたら、それはどうにもならない。この3つの条件をバラバラにすればよいというのが基本です。こういったところの研究が遅れていたわけです。みんな遅れていたんですけどね。手始めとして私どもはこういう調査をやって犯罪者をどういう風にやっていくかということを見ていったわけです。で、そうしますと分かったことは、いまは安全な家づくりに集中していますけれども、実は犯罪者から見ればどんな家でもやれるっていいです。そこで街づくり。安全な街づくりっていうのが最大の関門だということが分かってきました。先生も見られたかもしれませんが、街づくりをどうやったらいいのかと、泥棒とかいろんな犯罪が起こる時の明るさですね。明るさを調整しながら実験をやってきました。その結果、だいたいこうすればよいという事が分かりました、という状況までできています。それでどうしたらいいのかっていうことですけども、やはり一つの案ではない。家づくりよりもむしろ街づくりをきちんとやっていかなければいけない、と思っています。建設省が集合住宅やりましたけども、集合住宅っていうのはやりやすくて、手をつけやすい。奈良女子大学の湯川先生がやりましたけども、一緒に西葛西の団地を設計しました。アメリカでは技術的にしっかりしたものがあります。それをそのままってくればできるのですが、日本独特の個建住宅密集地の問題に関してはまだ答えがないのです。だけど答えは見えています。それを並べるだけです。私は並べつつあります。5月までに原稿を渡しましょうっていう話をしているのですが難しい状況です。

谷 アンケートを読んでいますと、だいたいこういった点についてポイントがでてきます。1つは、教育が悪い、もう少しモラル教育をするべきだ、規律教育をするべきだ、ということですね。もう1つは、厳罰主義。罪が軽いから犯罪を誘発している、もう少し監視社会にすべき、こういうような方向が市民の当然の反応としてできている訳です。短絡的ではありますが。専門家としてはどういう風にお考えですか。

清永 監視性を高める。これは、よろしいと思います。ただし、先生ごめんなさい。私、用意しとけばよかったのですけど。

谷 もし、何かあのデータとか資料でこういうものがあつたら後でお送りいただければ参考にさせていただきます。

清永 この資料も、どうぞ先生、お持ち帰りください。平井さんっていう長岡造形大学の人とつくりました安全な街づくりっていうのかな。その本を出すのが早すぎたのかと思います。私、最初、人間の歴史の中で安全はある。まさに自分個人が個人を守る。自分の体ごと守るという時代がはじまったと思います。しかしこれは絶望的で、弱肉強食という哲学に支えられる。弱いものは負けてしまう。それはしょうがない。あまりにもひどい。それで、コミュニティの時代がきている。一緒に守りましょう。これは、性善説に例えられている。コミュニティの中に入っているものはみんなその同じ志を持っている。しかし、そう

ではない。すぐに出てきます。すぐに性悪説に例えたものが出てくる。これはミッシェル・フックが言っていたいろんな監視社会。刑罰の社会が出てくる。監獄が開発されてくる。監獄型社会。しかし、誰も1回も悪いことしたことがない人間はいないので、じゃあ悪いことをしたみんな監獄に入ってしまうと社会は成立しない。そういうことで、20世紀に入って犯罪が起こるっていわれるようになったのです。人間を教育しましょう。人間を教育して弱い者を強化しましょう。弱者を強化するっていう話にかえていくわけです。今まだこれが続いております。しかし、これにも限界が見えてきました。いかに強化してもやられるものはやられる。それこそ、この本のもととなったんです。この本の過程で、愛知県で調査をやった結果、防犯登録の効果がどうだったかという、半径250mの中は犯罪が減ります。しかし周辺が盛り上がるのです。みんなは失敗だったって言うのです。でも私はそうじゃない。これは成功だって思う。壮大なる成功だったと言ったのですけど。犯罪をコントロールできる、物理的にコントロールできることが分かりました。何を言いたいのかというと、犯罪をコントロールする時代がきた。犯罪の管理時代。犯罪の管理ということは、起こしてはいけない犯罪を起こさせない。起こしてはならない場所で犯罪を起こさせない。それから被害にあってはならない人を被害者にさせない。その他にもこのような犯罪が起きた時、完全にこの被害を回復する。すなわち、被害者に対して補償するっていうような被害の回復で、人間の気持ちの回復ともいえる。この条件の結果として、犯罪の管理の法則を作らなければいけない。しかしこれが成り立つためには何が必要かということ、情報の公開。完全に私たちはこれをやりますって情報公開をやらなければいけない。それを管理しますからね。もう一つは市民の同意。これが必要。もう一つは、「こういうものをきちんとしたらこういうものになりますよ。」という科学的な視点が必要だろうと。これは補助命題。補助命題と主命題をセットで、犯罪の管理理論というものをきちんとつくる時代にきているのではないかと。先ほど先生がおっしゃった教育ですが、私は大切だと思います。しかし、教育しても必ずやられます。どんなにモラル教育をやったとしても犯罪者をゼロにすることは不可能でございます。しかし教育する必要があると思います。それですべてが済むということはありませんが、また監視性で強化することも賛成でございます。しかし賛成ですけども、ご存知だと思いますが、ロンドンは何ものすごいです。僕はちょうどロンドン大学にいてたときに起こった事件ですけど、爆弾が爆発しまして。向こうは内務省が対応するのですが、スコットランドヤードとですね。だいたい、我々は情報を持っていないというんですが実は、爆弾が爆発した瞬間、あっ切り取って捨てちゃったなあ、というところがうっているわけです、カメラに。

谷 社会安全の99年ですね。34号ですね。多分無くしても社会安全の所へ行けば見ることができます。

清永 言えば送ってもらえると思います。でバチッととっているわけです。

谷 私も感心した所は、例のイギリスで小さな子供を2人の少年が殺した事件ありましたね。問題になって世界的関心を集めたのですが、あれもちゃんとカメラに映っていますね。

清永 とっています。

谷 あれも監視社会。

清永 しかし私、監視カメラは嫌い。監視って嫌。私はセーフティーカメラと名前を代えたいです。そうしないと普遍性を持たない。広がっていかないだろう。新宿歌舞伎町でもやり始めていますけど、あそこだからしょうがないのですがイギリスの様に普及しているからとそんなことは考えないです。で、5年前に比べてかなり出ています。だから、とにかくこれはやらなきゃいけない。

谷 おもしろいこといった人がいるのですが、今、携帯にカメラがつくようになりました。いつもカメラを転送してどこかに蓄えておくとそこに情報を必ず残りますね。例えば、犯罪はものすごく抑止できるのではないかと。なるほどと思いました。ただし、そこまでいくと寂しい気になります。プライバシーもかなり侵害されますし。

清永 そうです。これが昔からの理論でいいますと、もしかしてご存知の通り、アメリカの建築家の誰かが言ったのですが。要するに監視性の強化と領域性と動線制御。

谷 オスカー・ニューマンの「ディフェンシブル・シブルスペース」ですね。

清永 動線制御ですね。で、この監視性って2つありまして自然監視性と人口監視性みたいなものがあります。人口監視性はまさにカメラみたいなもの。自然監視性は自然にお互いを見守ること。これが意外に効く。

谷 実際に見てなくても見られているのかもしれないっていう状況が大事ですね。

清永 犯罪者の行動を追いかけますとここにこうやりやすい。お金持ちの家があります。そこでこう、犯罪者の行動は分かれていきます。で、一外側が500mぐらいかな。いい獲物があるなって獲物主義です。ここに来ますとね、獲物とね獲物プラス見咎められないか。さらに、逃げやすいかって話です。こういう風にこう人間の心理は変わっていくのです。で、全部自然監視性、人口監視性ってじゃなくて行動生態学みたいなものにしたがって手の打ちようがあると思うのです。最後になりますと、逃げやすいかがきいてくるんですね。で、逃げやすいの中に一部としてみとがめられないかが人から見られてないかってのがすごく効いてくるんですね。ここのところをうまくセットしてまちづくり、いえづくりお互いに安保のまちづくりをしていけばいいだろうって感じがしてくるのです。で、この前都市計画科学会。

谷 そこ、私、入っていますから……。

清永 そうですか。お話し申し上げたのですが犯罪者っていうのはこう、こう、十字路こうあって、こうあって、こうあった時にここに大きな通りがあったならば、この大きな通りから一本入ったところでやるんですね。あまり入りすぎると自分が逃げられない。であまり浅いとみんなから追いかけるんです。一步入ったときにこの家とかを狙うのです。この家とかこの家とかを狙うのですがね。まあ、彼はぐるぐる回るのですけども回っていった時に、ここにどう入っていくかって泥棒の目の玉にアイカメラを付けてまして、目の玉はどこを向いているかって、その気になってやりましたのです。そうしたら2階から見て行くんです。人間は1階にカギをかけるけれど2階にはカギをかけない。それがわかってきた。その次に狙う家を見てどこを見るかというところを見るのです。どういう状態からによって選ぶのをやめたりするんですね。やっぱここにガラスがある。ガラス窓があって明かりがついている。あっ、いたかなあって。なにを言いたいのかって例えばこう（図を書きながら）、ブロック塀がある。泥棒って言われたときに泥棒がどう逃げると思いますか？

谷 コラ、泥棒って？

清永 ここから入ってきた、玄関。入ってきた侵入口があります。どう逃げると思います？こっちから逃げます。

谷 こちらから逃げたのですか？

清永 こっちに逃げる？こっちに逃げない。どこに逃げるか。こう行く（裏の家の方向）。

谷 ブロック塀に入る？ブロック沿いに逃げるのですか？

清永 ええ。ブロックを2つ加えると追いかけれない。ブロック塀は身を隠してくれる。

谷 ブロック塀の植え込みが多いほど泥棒に入られやすいということですか？

清永 そうです。ピョンとこう。絶対安全だって言う。

谷 ああ。そうですか。

清永 で、何を言いたかと言うと、お互いに泥棒にとってみればブロック塀は通路なんですね。ブロック塀に上がることによって今度は2階に届きます。自分によいと思ってやったことが隣の家の侵入口になるってことがとても多い。そこは、まちづくりやいえづくりをやるにしたがってお互い話し合ってやらなければならない。

谷 家はですね。我が家の事を言いますと、前面は低いブロックの上にフェンス。両隣側も先にわが家と同じように作りまして。だから、隣はつくろうとしなくてスカスカです。絶対泥棒入らないですね。目の高さのフェンス、通りから丸見えですし。

清永 賛成。私の家は塀も作りません。そのかわり私の家は泥棒さんが一度は先生さすがですねと言わせたものですが（図を書きながら）、敷地がありまして、窓がこうやって玄関がこうなって……。扉がこう、アクセスがあるんですけど、ピタッと木を植えます。塀も何も作りません。ピタッとそのかわりどうしたかと言いますと、ここに砂利をうちます。自然の音がする。

谷 それはわが家もやっています。

清永 お互いに。

谷 犬が通るたびに音がガシャガシャ。

清永 そうそう猫が通ってうるさいから。

谷 わが家も塀のない家づくりやりたいのですが、犬の散歩で糞とかされるので一応ふさいであります。目線は完全に通っちゃう。

清永 音、光、臭い、視線ですね。光の中に視線。

谷 昨年まで石川県の住宅マスタープランやっけていまして今度、建設省が国土交通省になって、住宅政策が今度、地方整備局でやれと言われて、その懇談会の委員になりました。今、住宅の中でバリアフリーとか省エネとか耐震ですね。安全対策がほとんどない。

清永 耐震が安全として唯一ってことでしょうね。

谷 しかも、区画整理をつくられている住宅が全部、みんなこれの反対をやっています。生垣をつくって。車でしか出入りしない。だから要する人が歩かないことを前提にしてつくられたまちですね。私が言ったのは、つくるのだったら、家の少なくとも一部屋は通りに面させなさい。そうするとそれが監視のシステムになります。

清永 なりますね。先生がおっしゃった通り、私もそう思います。イギリスなんかを見ますと完全にデタッチメントハウスにしても前庭をこう、ずっと家が連なっていて、階段が見える。ちょっと窓が外に出てる。あれは良いと思う。私はそういう意味ではイギリスと日本の比較をやりました。

谷 また、もしその関係の資料も、何かあったら送って下さい。後でいただければ参考にさせていただきます。

清永 イギリスと日本の建築屋さんにある区画を出しましてね。安全なまちづくりのためにまちづくりという視点から区画を変更するにはどうしたらいいのかという話をしまして。全然違いますね。イギリスと日本では。これは、テレビ番組でつくりましてNHKの首都圏版でやってもらいました。

谷 そのへんのことはおいおい都市の空間論にもっていきたいと思っているのですが、とりあえずはまあ現状は割と幅広く安全に対する意識調査をやっています。

清永 ですから。まあいろいろ頭の中でこんな事はどうなっているのだろうか、ございましたらいつでも遠慮なしに問題提起していただきたい。

谷 帰っていろいろまとめていくとまた疑問が起こってくると思いますので、あの比較的このアンケートを行う前には都市型犯罪に的を当てていたのですが途中でテロが起こりましてどうしてもそれを避けて通れないものですから、テロについても聞いたのですが。国際犯罪についてどういう風に思われますか。

清永 テロは難しいですね。私がイギリスに行って内務省に出入りしていた時に、テロの定義をかえました。一つはサイバーテロみたいなもの、それからブラックメールみたいなものもテロだと。従来型のテロリズムっていうのはあんまり馴染まない、そういうのもかなり多くなって、テロの定義を変えて来ている。どのテロを問題にするかによってずいぶん違う。しかし、人間の復讐っていうのかな、テロはある意味では復讐だと思うのですが。そういった復讐というのが、では単純に警察が代わりにやってくれるものの能力が低下してきていますから非常に復讐のやり方が個人化している。しかし、その一方で、国と国との軋轢が、ストレスが非常に強くなっているから、国と国とのぶつかり合いになってテロが非常に多様化してきたということだと思ふ。どのテロを問題にするかだと思ふ。テロを防ぐ事はできるか？私はできないと思ふ。アメリカも永遠にテロに見舞われ続けるでしょうね。政策としては完全に失敗です。

谷 まあ、あの基本的には2つの方向が感じられます。一つはテロに対して毅然とした態度で叩いた米軍が正しいとしたスタンスと、そうではなくて、テロを起こした原因はアメリカ側にあるのだからそれを反省すべきと言う、両極に分かれている気がしますね。

清永 私は、テロというより犯罪だと思ふですね。それをテロリズムと置き換えたブッシュがバカだと思ふ。結果、イスラム対キリスト教の世界の対抗にもっていった。そうすると宗教戦争になってしまう。宗教を敵に回して勝利できた国っていうのは無い。そういう意味で永遠にテロ、宗教戦争の形をとったテロリズムに巻き込まれるでしょうね。しかし、少なくともテロによって人間が理不尽に死んでいく。このことに関しまして、やはり、ピシッとたたえていかなければならない。防ぐには、国を振りかざしていくわけですね。でも、アメリカは開けた国としていろんな人が入ってくる。それは無理ですよ。

谷 イギリスも北アイルランドの問題で結構永いこと苦しみましたけども、やっぱりああいう状況も結構続くのですかね。アメリカもイスラム社会の問題で同じように。

清永 それは今、力で押さえ込んでいます。

谷 あと、国際犯罪。特に外国人の犯罪って言うと、住んでいる外国人が悪者で、犯罪を起こしている風にテレビで伝えていますが、オクダ先生なんかは非常に嫌う。私も同感で、日本にまともに来ている外国人はかなりまじめで、そういう人も被害者になっている。風評の実際には犯罪を起こしているのは実は、

家の家内も一度やられたのですが、例えば勧告のスリ集団。短期の滞在で、一週間ぐらいで荒稼ぎしてさっさと帰ってしまう。それから中国の蛇党のような、犯罪者を送り込んで暴力団とからんでいると思うのですが。彼らを実行犯にして国外に出ちゃいますから後が残らない。足がつかないですね。国際犯罪はものすごく増えていると思う。

清永 もう一つ問題があります。奥田先生が怒るかもしれませんが、外国人問題に関しましてはじめて警察庁が官庁の役所の中ではじめてとりあげたのですが、私出てこいって言われて出て行きました。その時、いろんな国はどの様に外国人対策をやっているかって調べに行きました。異常だったのがフランスでした。どういうことかと言うとフランスへの流入外国人の子供の犯罪が他の国に比べて異常に高いのです。それは、なぜかと言うと親がフランス籍をとる。子供がフランス人になります。しかし、このフランス人は実は親からの教育の中でフランス語の教育を受けることができなので言語のハンディが入ってきます。フランスは言います。「おまえ達にも同じ機会を与える、出世の機会を与える」と。頭がよければ、おまえ達は、どこまででもいけると言うのですが、このハンディがものすごく効いてくる。彼らは生まれながらにしていけるところは決まっている。グループをつくる。このグループは異常に犯罪をやる。親が外国人であったという者の中の、犯罪者の発生率は異常です。だけど、同じ事がそれは今、少しずつあると思います。確かに先生がおっしゃいました様に短期流入型。短期流入型の犯罪者集団の流入しているのは非常に出てくると思います。しかも同時に、日本に入ってきて日本の国籍をとっていった親がこれと同じような子供達を生み出す可能性が高いと思います。この世代というのはショッキングを与えていると思います。ショッキングを与えてなんとか日本の中に定住化してきます。しかし、子供は非常に不安な状況に実際置かれています。この子供らは、何らかの職を求めざるおえない。帰る国を失っております。この子供達はどうするのか。本当に問題です。一度先生、新宿をご案内します。

谷 藤岡でしたっけ、豊橋とかですね。異国の子供と地元の子供も抗争いくつか知っているのですが。日本の場合なかなか国籍はとれないですね。国際結婚しない限り短期労働者がどうしても結婚して国籍をとるのはなかなか難しいので。フランスのようにどんどん国籍をとらずって状況はない。

清永 実は短期流入型も国籍はないけど、定住しつつある。それはなにかと言うと、アンダーグラウンドで生きている。子供が生まれつつあります。完全無国籍。先生一度は見に行きましょう。かわいそうですよ。子供達は外に出られない。これくらいの部屋の中に20人はいた。窓は完全にピタッと閉じている。そういう中で24時間子供は育てている。どうするのだろうと思います。でも、日本の経済は落ち込んでいますから絶対量は減るかもしれない。だけど、ここの中の子供は確実に育てています。

谷 それは奥田先生が何をおっしゃるか聞いてみたいですけど。

清永 言っといてください。

谷 確かにまだ深刻な犯罪を起こすものには至っていないけれどそういう状況はつくられつつあるってことでしょね。

清永 これが育ってきた時に問題が起こるでしょうね。帰ることができないし、帰せないでしょう。国籍を与えなければならぬ。健康の問題と教育の問題がかぶさってきます。新宿なんか実際ご存知の通り、親がどの国籍だろうとともかく子供を保護するって意味で出て行きなさいと。子供に関しては国籍問わず学校にいれるってところまでできています。と言う問題は大変です。

谷 犯罪者を一回追放したのは偽造パスポートで入ってきている。もう犯罪者天国。外国人にとって犯罪者天国になりつつあるっていうのは認識しています。

清永 本当です。問題はなにかと言うと、実は従来の日本の犯罪っていうのはお金しかとらなかつた。そうしないと売りさばく場所がなかつた。売りさばく場所で唯一あつたのは質屋です。質屋に対する質屋対策っていうのは防犯対策上重要だった。しかし、今はマーケットができた。国内にできるマーケットと国内の安売店のマーケット、この彼らの中でマーケットをつくった。これが日本人向けのマーケットで、これが自分達向けのマーケット。これがどこに、流れていくのかと言うと、外国に大きなマーケットができた。外国マーケット。いろんなものをとってもスリリッとしていく。こういうものを通して。

谷 今、輸入車の盗難は、ほとんど外国へ持って行っちゃいますから犯人捕まえても物が無い。私ものすごくあまいなと思ったのが、建設重機です。あれは鍵はみんな一緒に、盗まれることを考えていない。いたずらで動かしたりして事故起こさないために鍵がついているだけ。それから南京錠ありますよね。実は数パターンしかない。南京錠いっぱい買くと、どれかで開く。私もやってみましたところ開きました。日

本という国は安全に対して、気を配ってこなかった。それだけ安全だったと言えば安全だったのですが逆に、国際化になると一挙に一番危険な国になる。可能性が大だと思う。私の家内が韓国のスリ団にあった時も、すられた時はぜんぜん気が付かなかった。グループでやっていて、前に注意をそらさして後ろでやっている。被害届を出したとき追いかけてはいけないと言われたらしいです。そのあと追いかけてさされた事件ありましたね。それからよく犯罪者を取り締まろうとした警察官が刺されたり、アメリカだったら先に撃っちゃいますよね。日本はそれが非常にできない仕組みになっている。この前、正当防衛じゃなくても発砲してもいいとなりましたね。それまで向こうが撃たない限り撃てなかったのかっていうことですよ。

清永 実は、ずいぶん前に警察官が所持するピストルの規格改正がございまして、威嚇効果さえあればいいだろうと言うことで、銃身を短くしたのですが、そのあたりから状況が悪くなった。警察官が銃を向けたら、誤射を避けて周りの人が逃げろって言われている状況です。もう、一つ話があって前に警察庁の科学警察研究所っていう所に私いまして、そこにいた女性が電車の中でポシェットを前にしていたのですがお尻さわられまして嫌だと言っていき前から切られて全部盗られた。面白い話、たくさんあります。

谷 お話聞いていてもきりがないので、ここで終わりにします。

清永 何かさらに問題があったらおっしゃってください。また、お話しします。